



キリスト者として生きる

現代社会の座標軸をもとめて

第16回

森本あんり

もりもと あんり
国際基督教大学教授

『ダ・ヴィンチ・コード』の教義論

『ダ・ヴィンチ・コード』をご覧になりましたか。三年前に小説が出版され、ごく最近映画にもなって全世界で公開されました。わたしは本にも映画にもあまり興味がありませんでしたが、先日ある雑誌に解説文を依頼されて、やむなく本を読みました。

レオナルド・ダ・ヴィンチの『最後の晩餐』に秘められたメッセージをめぐって、初期キリスト教の根幹を揺るがす歴史の再解釈

が示される——そんなセンセーショナルな宣伝に、わくわくする人とうんざりする人と、本誌の読者はどちらが多いのでしょうか。巷には、原作の提示するさまざまな解釈の真偽を論ずるウェブサイトがあり、「謎解き本」も何十冊と出版されています。

著者は、フィクションとノンフィクションをとてども上手に織り交ぜて書いています。あくまでも娯楽作品という位置づけを捨ててはいませんが、抑圧された異端の歴史うんぬんというくだりについては、自分も本当だと信じている、と語っています。そのため、画像学や聖書学などの専門家にあれこれとまちがいを指摘されることにもなりました。

わたしは、そういうまちがい探しに加わろうとは思いません。これは、あくまでも娯楽作品として楽しめばよいので、多少の歪曲や誇張に目くじらを立てて訂正するほどのことではない、と思います。しかしそこには、具

体的な個々の事実がどうというよりも、人間の思想や歴史の動き方について、著者に限らず多くの人が抱く思い込みのひとつが表れているように思います。

それは、「教義」というものがどのようにして決められるか、ということですが。著者は、初期キリスト教の歴史が、正統派の教義によって「異端」とされた人々が次々と闇に葬られていった歴史であると考えています。いわゆる「謀略説」の一種ですから、多くの読者が興味を惹かれるのもこのあたりでしょう。

著者の言うとおり、形成期のキリスト教が女性を次第に抑圧していった、という事実は否定できないと思います。教会という組織の中で、政治や陰謀が渦巻いた、ということも多々あったでしょう。けれども、そのための手段として教会が強引に教義を定めた、というのにはありそうにない話です。教義は、多くの場合、人々がすでに実際に信じていること

わたしは、まちがい探しに加わろうとは思いません。あくまでも娯楽作品として楽しめばよいので、

多少の歪曲や誇張に目くじらを立てて

訂正するほどのことはない、と思います。

しかしそこには、具体的な事実がどうというよりも、

人間の思想や歴史の動き方について、多くの人が抱く

思い込みのひとつが表れているように思います。

それは、「教義」というものが

どのような形に決められるか、ということなのです。

から出発して、これに形を与えるというしかたで成立するからです。

たとえば、キリスト教で教義のいちばん最初に来るのは「三位一体の神」と「キリスト神人両性論」ですが、これはどちらも、初代のキリスト者たちが実際に信じ、告白し、賛美し、祈ったことの内容を総合して、それを定式化したものです。誰か偉い人たちがどこかに集まって、いきなり相談して決めた、というわけではないのです。

もつと最近の例では、カトリック教会に特徴的な聖母マリアの教義があります。これも、一般信徒の長年の篤い信仰心に教会が動かされた末に、ようやく十九世紀と二十世紀にな

ってできたものです。

『ダ・ヴィンチ・コード』の中では、マグダラのマリアが長年「罪の女」と同一視されていたことが触れられています。これも、彼女がイエスの妻であったことを否定しようとして、ある日突然教皇がそう決めてしまった、というのは単純すぎる話です。むしろそれは、かつて罪の女であったけれど悔悛して「聖人」になった、ということを強調するための教えです。そこにも、聖人ならざる普通の人々の切なる願いが込められているのです。カトリック教会の典礼理解の中では「祈りの法は信仰の法」(Lex orandi, lex credendi)という言葉が、長く繰り返されてきました。

それは、「祈りの法」つまり人々の実際の信仰のあり方と、「信仰の法」つまり教義や神学における規範のあり方とが、いつも密接不可分の関係にある、ということなのです。

教義は、人々が何を信じているか、ということと無関係には決められません。もちろんそこには、批判や修正も加えられますが、前後関係だけに絞って言えば、神学や教義は、信仰の「後追い」にすぎません。歴史における人々の実際の信仰のあり方こそが、教義形成の素材なのです。

考えてもみてください。わたしたちは、どこかの偉い人がある日「こう」と決めたからといって、「はあそうですか」とそれを信じていることができるでしょうか。そういう「スジ」の人が「上で」決めたからといって、「では今日からそう信じましょう」と自分の信仰を変えるわけにゆかないでしょう。

正統派の教会が教義の権威で人々の信仰を操作した、などという筋書きは、こういう現実の力学を無視しています。何よりも、人々は昔も今も、そんなに愚かではなく、そんなに意のままに操られる羊のような群れではありません。

みなさん、どうぞ『ダ・ヴィンチ・コード』をすばらしい娯楽作品として楽しんでください——という結論にしたかったのですが、やっぱり少し腹が立ってきました。Ω